

オプション教材レンギョウ 読解マラソン集



読解問題のもとになる長文です。読解問題をやる人は、時間のあるときに読んでおきましょう。

読解問題は、清書の週で時間があまったときにやってください。時間がないときは、やらなくていいです。

読解問題は、選択式問題の解答のコツをつかむために行います。適当に全問やるのではなく、一問か二問でもいいですから確実に正解にするつもりでやってください。

読解問題の答えを作文用紙に書く場合は、問題の番号と答えがわかるように書いてください。書き方は自由です。読解問題の用紙は返却しませんが、選んだ番号と正解は「山のたより」に表示されます。

読解マラソンの問題のページから答えを送信すると、その場で採点結果が表示されます。（この場合、作文用紙に答えを書く必要はありません）

▼作文用紙に答えを書く場合（書き方は自由です。
作文用紙の余白などに書いても結構です）

▼読解マラソンのページから答えを送信する場合（この場合作文用紙に答えを書く必要はありません）
<http://www.mori7.net/marason/ki.php>

1.

3.

5.

「障子」という言葉は、むかし「間をさえぎりふさぐもの」というわけで、戸、衝立、襖などの総称であつた。もともとは中国から来た言葉であるが、八世紀ごろの西大寺の記録には、すでに障子の言葉が見えているという。平安時代にも貴族の邸宅にも、一般庶民の家に、壁などの間仕切りはなく障子をよく使った。

『源氏物語』を読むと、描写の中にさりげなく障子が出てくる。

「……こなたに通ふ障子の端のかたに、かけがねしたる所に、穴のすこしあきたるを、見おき給へりければ、外に立てる屏風を、引きやりて、見給ふ。」薫が夏の暑い日に、亡くなった宇治八宮の邸へ行き、こちら側に立ててあつた屏風を少しずらし、かねて見つけてあつた障子の小さな穴から、中の姫君たちをのぞくのである。どうもあまり貴公子らしからぬ振る舞いではあるが、大君を思うあまり、われとわが心を抑えかねてのことで、まあ大目にみなければいけないだろう。

『枕草子』の「にくきもの」には、こんなくだりがある。「遣戸を、あらくたてあくるもいとあやし。すこし持たぐるやうにしてあくるは、鳴りやはする。あしうあくれば、障子などもごほめかしうほとめくこそしるけれ」。板戸を手荒くあけたてするもの、いったいどういう料簡なのか、気が知れない。少し持ち上げるようにしてあければ、音など出はしないのに。あけかたが悪いから、障子などもごとごと音がして、まわりに聞かえるのだ、と清少納言はぶつぶついついているのである。何ともたてつけの悪そうな戸や障子の話である。これらの障子は、ともに現在の襖であろう。

いまのような障子は、むかし、「明障子」といわれていて、平安末期から使われ始めるが、普及するのは鎌倉以後である。『徒然草』に、障子の切り張りの話が出てくる。北条時頼の母、松下禅尼のところに、ある日息子の時頼が訪ねてくることになった。そこで「すすけたる明り障子の破ればかりを、禅尼手づから、小刀して切り廻しつつ張られければ」兄の義景が、全部張りかえたほうがいいでしょうとすすめるのを、「尼も、後はさはさはと張りかへんと

思へども、今日ばかりは、わざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ゐる事ぞと、若き人に見習はせて心つけんためなり」。つまり後ですっぱり張り替えようとは思っているが、きょうのところは若い人に見習わせて注意させるために、わざとこうしているのだといっているのである。

これは『徒然草』だけに出てくる話であるが、よほど有名になつたらしく、後に川柳に盛んによまれていく。一つ紹介しよう。

切張りは、大事をしやうじより教へ

「しやうじ」に障子と小事をかけている。天下を治める「大事」を、「しやうじ」で教えているということであろう。教育熱心な母というのは、いつの世にもいたということである。

(筒井迪夫『万葉の森 物語の森』)



それからまた相当な道のりを歩いた。銀蔵の言葉どおり、いたち川は左に曲りながら、木々の繁茂の中を抜けていた。そこから向こうを眺めると、道は極端に細くなっている。自転車を押して歩ける幅ではなかった。竜夫はそこに自転車を置いていくことにした。日が暮れてしまうと風が冷たかった。木々の下はもう全くの闇であった。草むらにビニールを敷いて、四人は足を投げだした。銀蔵が木の枝に懐中電灯をぶら下げた。虫の鳴き声とせせらぎの音が地鳴りのように高まつている。遠い人家の灯が水田の中に点在していて、それらはよく見るところもち低地で光っている。知らぬまに道はのぼつていたのである。川のほとりの道はそこから土手のように伸びているのであった。深い草むらが細道を包み込んでいた。

「もうどこらへんまで来たがやろうか？」

という英子の問いに、

「大泉を過ぎて、もうだいぶ歩いたから……」

体をまさぐりながら銀蔵は何かをさがしていた。

「しもうた。時計を忘れて来たちゃ」

英子も千代も時計を持ってこなかった。もちろん竜夫もであった。

「来た道をまた歩いて帰ることになるから、早いこと引き返さんど……」

千代が言った。英子をちゃんと家まで送り届けなければならぬと彼女は思っていた。いまから引き返したとしても、九時を廻るに違いない。

「なあん、遅うなつてもかまわんちゃ。……まだ螢の生まれるところまで来とらんのに」

英子是不満そうに前髪をつまんだ。

「生まれよとこでないがや。あっちこつちから集まつてきてエ、

交尾しよるところがや」

銀蔵は体から甘い酒の匂いを漂わせていた。

「千歩、歩こう」

とそれまで一度も口をきかなかった竜夫が言った。

「千歩行つて螢が出なんたら、あきらめて帰るちゃ」

「千五百目に出たらどうするがや」

と英子になさけなさそうに答えたのでみんな笑った。「よし千五百歩まで歩くちゃ。それで出なんたらあきらめるがや。それに決めたぞ」

梟の声が頭上から聞こえた。千代の心にその瞬間ある考えが浮かんだ。人里離れた夜道をここからさきに千五百歩進んで、もし螢が出なかつたら、引き返そう。そして自分もまた富山に残り、賄い婦をして息子を育てていこう。だがもし螢の大群に遭遇したら、その時は喜三郎の言うように大阪へ行こう。

立ちあがつた千代の膝がかすかに震えた。千代とて、絢爛たる螢の乱舞を一度は見てみたかった。出遭うかどうか判らぬ一生にいつべんの光景に、千代はこれからの行く末をかけたのであった。

また梟が鳴いた。四人が歩き出すと、虫の声がびたつとやみ、その深い静寂の上に蒼い月が輝いた。そして再び虫たちの声が地の底からうねつてきた。

道はさらにのぼり、田に敷かれた水がはるか足元で月光を弾いている。川の音も遠くなり懐中電灯に照らされた部分と人家の灯以外、何も見えなかつた。

せせらぎの響きが左側からだんだん近づいてきて、それにそつて道も左手に曲がつていた。その道を曲がりきり、月光が弾け散る川面を眼下に見た瞬間、四人は声もたてずその場に金縛りになった。まだ五百歩も歩いていなかった。何万何十万もの螢火が、川のふちで静かにうねつていた。そしてそれは、四人がそれぞれの心に描いていた

華麗なおとぎ絵ではなかつたのである。螢の大群は、滝壺の底に寂寞と舞う微生物の屍のように、はかりしれない沈黙と死臭をはらんで光の澱と化し、天空へと光彩をばかしながら冷たい火の粉状になつて舞いあがつていた。

四人はただ立ちつくしていた。長い間そうしていた。やがて銀蔵が静かに呟いた。

「どんなもんじゃ、見事に当たつたぞオ……」

「ほんとに、……凄いねエ」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

千代も無意識にそう言った。そして、嘘でなかったねエと言いながら、草の上に腰をおろした。夜露に濡れることなど眼中になかった。嘘ではなかった。千代は心からそう思った。この切ない、哀しいばかりに蒼く瞬いている光の塊に魂を注いでいると、これまでのことがすべて嘘ではなかった、その時その時、何もかも嘘ではなかったと思いたされてくるのである。彼女は膝頭に自分の顔をのせて身を屈めた。全身が冷えきっていた。

「おったねエ……」

耳元に囁きかけてくる英子の息が、竜夫の中に染み通ってきた。

「……交尾しとるがや。また次の螢を生みよるがや」

銀蔵の口調は熱にうかされているように、心なしか喘いでいた。

「傍まで降りて行こうか？」

と竜夫が言った。

「なん、いやや」

英子は竜夫のベルトをつかんで引き留めた。

「ここから見るだけでええがや」

「なして？」

英子はそれには答えず、ベルトをつかんでいる手の力を強めてきた。

竜夫は川のほとりに降りていった。

「竜っちゃん、やめよお、ねえ、行かんでおこう」

何度も呟きながら、英子はそれでも竜夫についてきた。間近で見ると、螢火は数条の波のようにゆるやかに動いていた。震えるように

発光したかと思うと、力尽きるように萎えていく。そのいつ果てると

もない点滅の繰り返しは何万何十万と身を寄せ合って、いま切なくわ

びしい一塊の生命を形づくっていた。

(宮本輝「螢川」)



「話」なしには夜も日も明けぬわれわれの生活であるが、聞くはしから忘れて行く話の分量も大変なものであろう。短編小説は、その意味では、まるで市井の淀みに浮かんで、かつ消えかつ結ぶ泡沫のごとくである。かえって子どもの時分に聞いたり読んだりした話の中に、奇妙にいつまでも忘れられぬものがある。

私の場合、例えば人さらいの話などはそうであった。まだ「原っぱ」というようなものがあちこちにあった時代で、「人さらい」という言葉にもかなり実感があつた。遊びに熱中して日が暮れても家に帰ろうとしない子供を脅すのに、大人はよく人さらいの話を持ち出した。

さらわれた子供はサーカスに売られ、曲芸をするのに身体を柔らかくするため酢を飲まされる。そして、くる日もくる日も鞭で叩かれ、泣く泣く球乗りや綱渡りの芸を仕込まれる。それでも子供の身空では逃げ帰ることもかなわないなどと、今のサーカスの人が聞いたら怒るだろうようなことを、まことしやかに吹き込んだものである。

人の子をさらって行くのは、人間とはかぎらない。大きな驚が幼児を連れ去ったという、伝説めいた話も年寄りから聞かされた。驚は、その子をどこかの寺の高い松の梢に引つ掛けて行つた。それを運よく坊さんに拾われて育てられ、その子も長じて偉い坊さんになつたとかいう話であつた。

子供心には、そういう話はお化けや幽霊のそれとはまた違った恐怖を与えた。子供はサーカスの苦行が恐ろしいのでもなければ、大驚の爪に襟首を掴まれて宙高く舞い上がり、むりやり遠方まで飛行させられるのがこわいでもない。そうした出来事の向こうに、故郷の家を思い父母を恋うて泣き暮らさねばならない永い年月を想像して、白日の悪夢のような絶望感におそわれるのである。

森鷗外の短編『山椒大夫』でも知られる「安寿と厨子王」の話も、子供には救いような話の見本のようにであつた。小学生の私は、あれを最初に講談社の絵本で読んで、やりきれない気持ちにさせられた。男の子なら誰しも自分が厨子王の身になつて読むにちが

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

いないが、おなじ人さらいに会おうのも母親と姉と姥と四人づれなのがいくらから心丈夫かと思うと、そうは行かない。姥は海に身を投げ、母は別の舟に乗せられて、あつという間に反対の方角に遠ざけられる。姉さんはやがて自分を助けるために、沼に入つて死んでしまう。それでも自分は立派に成人して地方の役人になり、ついには母親にめぐり会ふのは嬉しいが、しかし、その母は老いさらばえた乞食のような姿で、しかも盲目で、とある農家の庭先で粟にたかる雀を追っている。「安寿恋しや、ほうやれほ。厨子王恋しや、ほうやれほ。鳥も生あるものなれば、疾う疾う逃げよ、逐わずとも」と、その口ずさむ歌も哀れのきわみである。

子供は、自分が受けた感動の内容を大人のように言葉で説明することはできない。ひどい話を読んだあとでは、何か毒でも飲まされたような苦しみが残るにすぎない。それを仮に言葉にすれば、悪人の働きが恐ろしいとか、姉さんの身の上がかわいそうとか、お母さんの姿が痛ましいとかいうだけではない。それよりも、そんなふうにして失われた月日は二度と返らない。たとえ母親が命だけは無事で、息子もちゃんと大人になつたとしても、過ぎた時の埋め合わせは誰がしてくれるものでもない、それはあまりに残酷である、というようなことだつたらう。

(阿部昭『短編小説礼讃』)

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34



なにぶん絵本のことで、生々しい絵の印象も手伝ったにちがいないが、「安寿と厨子王」の話は私には暴力にも似た一撃であった。グレアム・グリーンが『失われた幼年時代』で言っているように、「本と

いうものがわれわれの人生に深い感化を及ぼすのは、おそらく幼年時代だけである。それ以後は、感心したり、面白がったり、これまでの見方を修正したりすることはあっても、多くはすでに考えていたことを本で確認するにとどまる。恋をしていると、自分の顔かたちが実物以上によく見えるような気がするのと同じである。」

私が鴎外の『山椒大夫』を読んだのは、大人になってからであった。そして今度また久しぶりに再読したが、結末のところを見て、そうかと思った。あの母親は、可愛いさかりの娘と息子をさらわれた

哀しみに夜も昼も泣いて暮らすうちに、とうとう目がつぶれてしまった、というくだりがあるような気がしていたからである。むろん、作者はそんなことは書いていなかった。書く必要もなかったにちがいない。私はたぶん昔の絵本でそう読んだのか、でなければ自分でそう考えたのであろう。いづれにしても、私の心には絵本のイメージのほうが生きていたのである。

私が鴎外の結末でいい加減に読み過ぎしていた箇所は、もう一つあった。作者はこう書いている。

「女は雀でない、大きいものが粟をあらしに來たのを知った。そしていつもの詞を唱えやめて、見えぬ目でじつと前を見た。そのとき干した貝が水にほとびるように、両方の目に潤いが出た。女は目が開いた。」

『厨子王』という叫びが女の口から出た。二人はぴったり抱き合っ

た。それは厨子王が姉の形見に肌身離さず持っていた守り本尊の力であるという。そこが、ほとんど私の印象にはなかった。絵本のほうはどうであつたかは、もう覚えていない。子供心にも、この最後の奇蹟はいくぶん付けたりのように思われたかもしれない。今の私には、親の一念、子の一念とはそれほどのものかもしれないと思う気持ちもある一方で、不幸な女の盲目という書き方に、何か古い物語

の慈悲のようなものを感じる。ハッピーエンドがつまらぬというのはなく、目が明くことのほうが残酷な場合も人生にはあるだろうからである。

作者鴎外は、この作品の発表（大正四年）と同時に『歴史其儘と歴史離れ』という文章を書き、自ら詳しい問題を行っている。そして、「山椒大夫のような伝説は、書いて行く途中で、想像が道草を食って迷子にならぬ位の程度に筋が立っているというだけで、わたくしの辿って行く系には人を縛る強さはない。わたくしは伝説そのものをもあまり精しく探らずに、夢のような物語を夢のように思い浮かべて見た」と言っている。

「夢のような物語を夢のように」というその夢は、ある特定の個人が見る夢というより、われわれ日本人の誰しもが民族の血の中に受け継いできた古い歴史の余映のようなものである。夏目漱石も短編集『夢十夜』（明治四十一年）で、われわれの現在を支配する過去の恐ろしい姿を、不条理なイメージの断片を突きつけるようにして、あばいて見せた。伝説のみならず、お伽噺や民話や怪談のたぐいがいつの世にも子供の心をとらえるのは、子供自身の血の中に、自分が生まれる何代も前の記憶を呼び起こそうとする本能が潜んでいるからだとも考える他はない。

（阿部昭『短編小説礼讃』）



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

三月十五日、いつものように長谷川伸先生のお宅へうかがって、お居間の障子をあけてペコンとお辞儀をして、きょうは先生のお誕生日、おまけに喜の字のお祝いの日だから、

「おめでとうございます。」と申し上げたら、毎度のことで私よりもぐんと低く頭を下げて応じてくださる先生のお顔がひどく若々しく見えた。若く、と気がついたのはしばらくたってからで、その時は、なんだか知らないが変わったと感じたのが本当のところだ。間もなく、ヒゲをそったんだよ。と先生がいわれて、ああと思った。

「ヒゲをそって、若返ったつもりでみんなと一緒に勉強するよ。」と改めておっしゃる。再びああと思った。涙が出そうになって困った。だから、きょうの先生はお若く見えるのか、とようやくにして気がついた。同時に若い者に負けぬぞという先生の気迫がびりつと来て、私は必死になった。先生の門下生で一番若いのが私である。ファイトを燃やさずにはいられない。私がエツチラオツチラ登って行く坂道の上のほうで、先生は腰をおろして待っていてくださるのではない。先生も汗水流して登っておられるのも、おいてきぼりを食ってたまるもんかと思うのだ。

坂道で思い出した。先生からうかがった思い出話にこんながある。坂道を荷車が上がっていた。先生と奥様が通り合わせ、容易ではない荷車の様子を見てあと押しをした。荷車の主はそれと気づいてお礼をいおうとしたが、車が坂を上がりきった時、先生方は道の反対側へ行ってしまったので、だれが押してくれたのやら、荷車の主にはわからない。荷物のおかげで見えないのだ。ところが向こうから来た見ず知らずの人が、先生と奥様へありがとうございますと、そつと頭を下げて行ったというのだ。

この話、私は外で情けないことがあつてペソをかいている時に聞かされた。雨があがつて、曇りのち晴れになったことはいまでもない。その時に、もし私がお調子に乗って、車を見つけたら私も押します。だれもお礼をいってくれなかったら自分でありがとうといいます。とでもしやべったら、きつと先生は笑いながら、押すのもいいが、押してもらっているのを忘れるなよ、とおっしゃりはし

なかったかと考える。

最近、私は先生の受け売りをよくやる。私が先生のその時のお言葉に救われたと同様にか、また別な意味で私の受け売りにマブタを熱くする人がきつとあるに違いないと思うからである。先生は伝道師でも講釈師でもないから、だれにでもその各々に適した話をしてあげることはなさらない。だから私が受け売りをする。

少々は間違った受け売りの仕方をして先生は苦笑しておっしゃるに違いない。

「アンテナのいい子だとほめたけれど、どうも近ごろはチャンネルが多すぎるらしいね。」

すみません。先生、大至急でアンテナのそうじをします。

(平岩弓枝「お宮のゆみちゃん」)



猫は吐き気がなくなりさえすれば、依然として、おとなしく寝ている。このごろでは、じつと身をすくめるようにして、自分の身を支える縁側だけがたよりであるというふうに、いかにも切り詰めたうずくまり方をする。目付きも少し変わってきた。はじめは近い視線に、遠くのもの映るごとく、悄然たるうちに、どこか落ち着きがあったが、それが次第に怪しく動いてきた。けれども目の色はだんだん沈んでゆく。日が落ちてかすかな稲妻があらわれるような気がした。けれども放っておいた。妻も気になかなかつたらしい。子供はむろん猫のことさえ忘れている。

ある晩、彼は子供の寝る夜具のすそに腹ばいになっていたが、やがて、自分の捕った魚を取り上げられる時に出すような唸り声をあげた。妻は針仕事に余念がなかった。しばらくすると猫がまた唸った。妻はようやく針の手をやめた。自分は、どうしたんだ、夜中に子供の頭でもかじられちゃ大変だと言った。まさかと妻はまた襦袢のそでを縫いだした。ネコはおおりおり唸っていた。

明くる日は囲炉裏の縁に乗ったなり、一日唸っていた。茶をついたり、やかんを取ったりするのが気味が悪いようであった。が、夜になると猫のことは自分も妻もまるで忘れてしまった。猫の死んだのは実にその晩である。朝になって下女が裏の物置きに薪を出しに行った時は、もう硬くなって、古いへついついの上に倒れていた。

妻はわざわざその死様を見に行った。それから今までの冷淡に引きかえて急に騒ぎだした。出入りの車夫を頼んで、四角な墓標を買ってきて、何か書いてやってくださいと言う。自分は表に猫の墓と書いて、裏に「この下に稲妻起る宵あらん」としたためた。車夫はこのまま埋めてもいいんですかと聞いています。まさか火葬にもできないじゃないかと下女が冷やかした。

子供も急に猫をかわいがりだした。墓標の左右に硝子のびんを二つ活けて、萩の花をたくさん挿した。茶わんに水をくんで、墓の前に置いた。花も水も毎日取り替えられた。三日目の夕方に四つにな

る女の子が——自分はこの時書斎の窓から見ていた——たった一人墓の前へ来て、しばらく白木の棒を見ていたが、やがて、手に持った、おもちゃの杓子をおろして、猫に供えた茶わんの水をしゃくって飲んだ。それも一度ではない。萩の花の落ちこぼれた水のしたたりは、静かな夕暮れのなかに、幾度か愛子の小さいのどを潤した。

猫の命日には、妻がきつと一切れの鮭と、鰹節をかけた一杯の飯を墓の前に供える。今でも忘れたことがない。ただこのごろでは、庭まで持って出ずに、たいていは茶の間のたんすの上へ乗せておくようである。

（夏目漱石「猫の墓」）



その子供には、実際、食事が苦痛だった。体内へ色、香り、味のあ
る塊かたまりを入れると、何か身が汚れる気がした。空気のような食べ物は
ないかと思う。腹が減ると飢えは十分感じるのだが、うつかり食べる
気はしなかった。床の間の冷たく透き通った水晶の置物に、舌を当
てたり、頬を付けたりした。飢えぬいて、頭の中が澄みきったまま、
だんだん気が遠くなつて行く。それが谷地の池水を隔てて、丘の後ろ
へ入りかける夕陽を眺めているときでもあると、子供はこのままの
めり倒れて死んでも構わないとさえ思う。だが、この場合はくぼんだ
腹にきつく締めつけてある帯の間に両手を無理に差し込み、体は前の
めりのまま首だけ仰のいて、

「お母さあん。」
と呼ぶ。子供の呼んだのは、現在の生みの母のことではなかった。子
供は現在の生みの母は家族中でいちばん好きである。けれども子供に
は、まだほかに自分に「お母さん」と呼ばれる女性があつて、どこか
にいそうな気がした。自分がいま呼んで、もし「はい」と言つてその
女性が目の前に出て来たなら、自分はびつくりして気絶してしまうに
ちがいないと思う。しかし、呼ぶことだけは悲しい楽しさだった。

「お母さあん。お母さあん。」
薄紙が風に震えるような声が続いた。

「はあい。」

と返事をして現在の生みの母親が出て来た。

「おや、この子は、こんな所で、どうしたのよ。」

肩をゆすつて顔をのぞき込む。子供は勘違いした母親に対して何だ
か恥ずかしく、赤くなった。

「だから、二度三度ちゃんとご飯食べておくれと言うのに。さ、ほん
とに後生だから。」

母親はおろおろの声である。こういう心配のあげく、卵と浅草海苔
がこの子のいちばん性に合う食べ物だということが見出されたのだっ
た。これなら子供には腹に重苦しいだけで、汚されざるものに感じ
た。

子供はまた、ときどきせつない感情が、体のどこからからかわか

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

らないで体いっぱい詰まるのを感じる。そのときは、酸味のある
柔らかいものなら何でも嚙んだ。生梅や橘の実をもちで来て嚙ん
だ。さみだれの季節になると、子供は都会の中の丘と谷あいになら
の実の在所を、それらをついばみに来るからすのようによく知ってい
た。

子供は、小学校はよく出来た。一度読んだり聞いたりしたものは、
すぐわかつて乾板のように脳のひだに焼きつけた。子供には学課の容
易さがつまらなかつた。つまらないという冷淡さが、かえつて学課の
出来をよくした。

家の中でも学校でも、みんなはこの子供を別物扱いにした。
父親と母親とが一室で言い争つていた末、母親は子供のところへ来
て、しみじみとした調子で言った。

「ねえ、おまえがあんまりやせていくもんだから学校の先生たちの間
で、あれは家庭で健康の注意が足りないからだという話を持ち上がった
んだよ。それを聞いて来てお父さんは、ああいう性分だもんだか
ら、わたしに意地悪く当たりなさるんだよ。」

そこで母親は、畳の上に手をついて、子供に向かってこつくりと
頭を下げた。

「どうか頼むから、もつと食べるものを食べて、太つておくれ。そう
してくれないと、わたしは毎晩、いたたまれない気がするから。」

子供は自分の異常な性質から、いずれは犯すであろうと予感した罪
悪を犯した気がした。わるい。母に手をつかせ、おじぎをさせてし
まったのだ。頭がかつとなつて体に震えが来た。だが不思議にも心は
かえつて安らかだった。すでに自分は、こんな不幸をして悪人となつ
てしまった。こんなやつなら、自分は滅びてしまつても自分で惜しい
とも思うまい。よし、何でも食べてみよう。食べ慣れないものを食べ
て体が震え、吐いたりもどしたり、その上、体中が濁り腐つて死んで
しまつてもよいしよう。生きていて始終食べ物の好き嫌いをし、人
をも自分をも悩ませるよりその方がましではあるまいか――。

子供は、平気を装つて家のものと同じ食事をした。すぐ吐いた。

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

口中や咽喉を極力無感覚に制御したつもりだが嘔み下した食べものが、母親以外の女の手が触れたものと思う途端に、胃袋が不意に逆に絞り上げられた――女中の裾から出る剥けた赤いゆもじや飯炊き婆さんの横顔になぞつてある黒髪つけの印象が胸の中を暴力のように掻き廻した。

兄と姉はいやな顔をした。父親は、子供を横眼でちらりと見たまま、知らん顔をして晩酌の盃を傾けていた。母親は子供の吐きものを始末しながら、恨めしそうに父親の顔を見て、

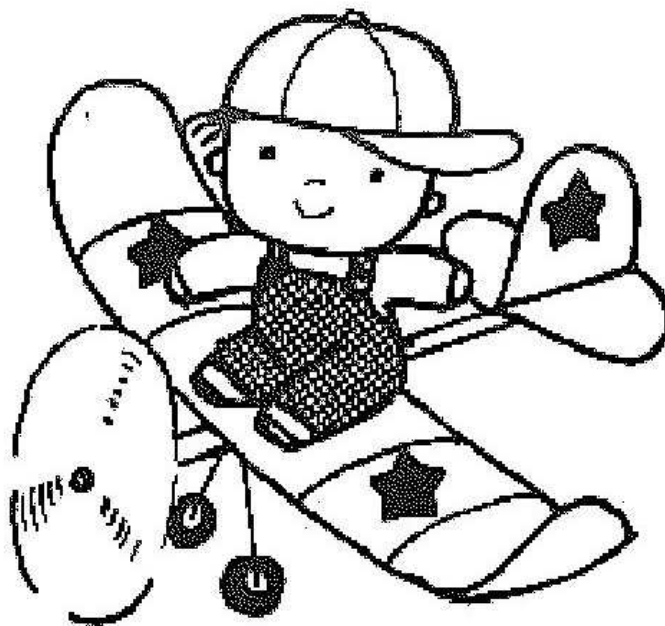
「それご覧なさい。あたしのせいばかりではないでしょう。この子はこういう性分です」

と嘆息した。しかし、父親に対して母親はなお、おずおずはしていた。

（岡本かの子「鮎」）



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



その翌日であった。母親は青葉の映りの濃く射す縁側へ新しい莫座敷を敷き、組板だの包丁だの水桶だの蠅帳だの持ち出した。それもみな買いい立ての真新しいものだった。

母親は、自分と組板を距てた向こう側に子供を坐らせた。子供の前には膳の上に一つの皿を置いた。

母親は、腕捲りして、薔薇いろの掌を差し出して手品師のように、手の裏表を返して子供に見せた。それからその手を言葉と共に調子づけて擦りながら云った。

「よくご覧、使う道具は、みんな新しいものだよ。それから捨てる人は、おまえさんの母さんだよ。手はこんなにもよくきれいに洗ってあるよ。判ったかい。判ったら、さ、そこで——」

母親は、鉢の中で炊ききました飯に酢を混ぜた。母親も子供もこんな噓せた。それから母親はその鉢を傍らに寄せて、中からいくらかの飯の分量を掴み出して、両手で小さく長方形に握った。

蠅帳の中には、すでに鮭の具が調理されてあった。母親は素早くその中からひとときれを取り出してそれからちよつと押さえて、長方形に握った飯の上へ載せた。子供の前の膳の上の皿へ置いた。玉子焼鮭だった。

「ほら、鮭だよ。おすしだよ。手々で、じかに掴んで食べても好いのだよ」

子供は、その通りにした。はだかの肌をするする撫でられるようなころ合いの酸味に、飯と、玉子のあまみがほろほろに交ったあじわいが丁度舌一ぱいに乗った具合——それをひとつ喰べてしまふと体を母に押しつけたいほど、おいしさと、親しさが、ぬくめた香湯のように子供の身うちに湧いた。

子供はおいしいと云うのが、きまり悪いので、ただ、にいつと笑って、母の顔を見上げた。

「そら、もひとつ、いいかね」

母親は、また手品師のように、手をうら返しにして見せた後、飯を握り、蠅帳から具の一片れを取りだして押しつけ、子供の皿に置

いた。

子供は今度は握った飯の上に乗った白く長方形の切片を気味悪く覗いた。すると母親は怖くない程度の威丈高になつて、「何でもありません。白い玉子焼きだと思つて喰べればいいんです」といつた。

かくて、子供は、烏賊というものを生まれて初めて喰べた。象牙のように滑らかさがあつて、生餅より、よつぽど歯切れがよかった。子供は烏賊鮭を喰べていたその冒険のさなか、詰めていた息のようなのを、はっ、として顔の力みを解いた。うまかつたことは、笑い顔でしか現さなかつた。

母親は、こんどは、飯の上に、白い透きとおる切片をつけて出した。子供は、それを取つて口へ持つて行くと共に、脅かされるににおいに掠められたが、鼻を詰まらせて、思い切つて口の中へ入れた。

白く透き通る切片は、咀嚼のために、上品なうま味に衝きくずされ、程よい滋味の圧感に混じつて、子供の細い咽喉へ通つて行つた。

「今のは、たしかに、ほんとうの魚に違いない。自分は、魚が喰べられたのだ——」

そう気づくと、子供は、はじめて、生きているものを噛み殺したような征服と新鮮を感じ、あたりを広く見廻したい欲びを感じた。むずむずする両方の脇腹を、同じような欲びで、じつとしていられない手の指で掴み搔いた。

「ひ、ひ、ひ、ひ、ひ」

無暗に疝高に子供は笑つた。母親は、勝利は自分のものだと思つてと、指についた飯粒を、ひとつひとつ払い落としたりしてから、わざと落ちついて蠅帳のなかを子供に見せぬよう覗いて云つた。

「さあ、こんどは、何にしようかね……はてね……まだあるかしらん……」子供は焦立つて絶叫する。

「すし！ すし！」

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

母親は、嬉しいのをぐつと堪える少し呆けたような——それは子供が、母としては一ばん好きな表情で、生涯忘れ得ない美しい顔をして、

「では、お客さまのお好みによりまして、次を差し上げます」

最初のときのように、薔薇いろの手を子供の目の前に近づけ、母はまたも手品師のように裏と表を返して見せてから鰯を握り出した。同じような白い身の魚の鰯が握り出された。

母親はまず最初の試みに注意深く色と生臭の無い魚肉を選んだらしい。それは鰯と比良目であった。

子供は続けて喰べた。母親が握って皿の上に置くのと、子供が掴み取る手と、競争するようになった。その熱中が、母と子を何も考えず、意識しない一つの気持ちの痺れた世界に牽き入れた。五つ六つの鰯が握られて、掴み取られて、喰べられる——その運びに面白く調子がついて来た。素人の母親の握る鰯は、いちいち大きさが違っていて、形も不細工だった。鰯は、皿の上に、ころりと倒れて、載せた具を傍らへ落とすものもあった。子供は、そういうものへ却って愛感を覚え、自分で形を調べて喰べると余計おいしい気がした。子供は、ふと、日頃、内しよで呼んでいるも一人の幻想のなかの母といま目の前に鰯を握っている母とが眼の感覚だけか頭の中でか、一致しかけ一重の姿に紛れている気がした。

(岡本かの子「鰯」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



地球環境問題複合体のどの部分を切りとり、そこにどのようにアプローチするか、その方法は、人によりさまざまである。それはその人の今までの経歴や現在の対象などに大きく依存しているからだ。しかし、ただ一つ、共通点がある。それは、どの切り方も二項対立に立脚していることだ。その結果、問題の「解決」は、二項対立の一方の極から他方の極へシフトすることとしてしか提唱されてこなかったのである。

(中略)

人間／自然の二分法は、そこに優／劣の直線関係をともなう。人間は優れたもの、自然は劣ったモノ。

この関係は動物どうしの中でも、縮小されて再現される。より人間に近いもの、たとえばチンパンジーや鯨は、より人間から遠いものの、たとえば蟻やクラゲより大切だということになる。商業捕鯨をめぐる一連の動きを思い出していただきたい。ぼくは鯨の肉を食べること自体には反対ではない。どこの民族が何の肉を食おうと勝手である。問題は、何を誰が食べるかではない。ある動物種が絶滅するかどうかである。この点に限ってみれば、商業捕鯨を規制（禁止ではなくて）する必要があるかもしれない。しかし、鯨やトキのように騒がれもせず、おそらく人間に知られることもなく絶滅していく昆虫は数知れず存在する。

あるとき、このような意見をアメリカの友人に話したところ、彼女はどうしても納得できないと言いつ張った。日本で開かれた国際学会のために来日した彼女を含め、十人ぐらいで鍋を囲んでしゃぶしゃぶをつついていたときのことである。

「鯨は人間のように賢い動物だ。それを食べることがどうして許されるのか？ あなたはチンパンジーの研究者でしょう（彼女もチンパンジーを研究している）。チンパンジーを食べることが許されますか？」

それは困る。日本には、チンパンジーを食べる習慣はない。だから、日本の食習慣に囲まれて三十年間も過ごしてきたぼくにとつては、鯨を食べることとチンパンジーを食べることは、等価ではない。アフリカの奥地の人々がチンパンジーを食べる風習をもっているとしたら、おそらくぼくは反対するだろう。チンパンジーは貴重な種であり、絶滅寸前だ、という理屈をもつて。これは百パーセント、ぼくの（さらに、多くは北側諸国に属しているチンパンジー研究者の）エゴである。アフリカ原住民の食習慣と、北側諸国のチンパンジー研究者の仕事と、どちらを優先させるか、という問題である。チンパンジー研究者や自然保護派は（少なくともぼくは）、自分の興味が優先される。

捕鯨反対も同じことだ。しかし、私の友人にはその構造が見えていないようだった。彼女にとつては、鯨を食べること自体が、絶対的な悪なのである。その価値観を押し付けるのは、エゴイズムである。また、鯨を食べていいというのも、エゴイズムである。どちらも、まったく同じ穴の貉なのだ。だからこの論争は、声の大きいほう、あるいは味方の多いほう、力の強いほうが勝つ。

自然保護は先進国のエゴだ、という批判がよくある。しかしこれは、批判になっていない。当然のことだからだ。頭のとっぺんから足の先まで、先進国エゴなのだ。それ以外に自然保護は存在しえない。だから、先に批判は批判になつていない。自然保護をそもそも否定するのなら話はわかる。しかし、そうではなくて、先進国エゴでない自然保護がある、と思つていふとしたら、とんでもない間違いではないだろうか。自分たちが食べない物を人が食べていても、自分たちには理解できないから、批判も容易だ。それだけのことである。それだけのことであるのに、あたかもそこに、絶対的な真実や善意、「大文字で始まる Truth」が存在するかのよう論じられるのはなぜだろうか。それは、自然と人間の間の差異を、断続ととらえる発想のなせるわざではなからうか。動物に対する見方の違いである。



33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

田辺がある女の子に好意を抱いていると気づいたのは、その年の夏休みが明けた頃だ。あんなにわたしの「保護」をうとましがっていた彼が、放課後よく目の前に現れるようになった。こちらの部活が済むまで図書館で時間を潰しているらしかった。図書館で宿題を済ませたほうが合理的だとか、貸出禁止の重たい辞典に用があるのだとか、田辺としては完璧な理由で防壁を築いたつもりだったろうけれど、わたしのクラスの子の話を聞きたがっているのは明らかだった。

色の白い小柄な少女で、勉強は抜群にできた。校則違反の赤いリボンを髪に結んでいて、ときおり注意されたけれども成績がよいせいあまり強くは叱られない。先生や男子に対するとときだけ声が一オクターブ高くなると言われ、同性の評判はきわめて悪い。たまに上級生の女子が数人、リボンを取れと彼女に詰め寄る場面が校内で見られるけれども、それはハタからはいたいたいな美少女が虐められている図にしか見えず、こんなところに出くわすとクラスの男子たちは果敢に上級生と闘ってしまったりして、他の女子を余計いらいらせていた。「ほんつと、おまえって見る目がないな」

吐き捨てるようにわたしが言う、彼はまず別に好きなわけではないと甲斐のない言い訳をムキになつて、次にわたしは彼女を誤解しているのだと少女を弁護し始めた。互いに腹立たしくなり、ずいぶん口論した。

「ちがうよ、みんな嫉妬されて孤独なんだよ」

「孤独う？ どつからそんな言葉が出てくるんだよ。言つてて恥ずかしくない？」

「孤独なんだ。高岡にはわからないんだ。」

「あー、そうかよ。じゃあ、孤独な美少女にラブレターでもなんでも書きやいだろ。そんな度胸、あんのかよ」

彼がこんなふうに何かを主張するのは初めてだったから、わたしは多少狼狽していた。もういいよ、と背をむけて歩き出す田辺に追

い打ちをかけずにはいられなかった。「書けば？ なんだったらあたしが聞いてきてやろうか、田辺君をどう思うって。知らないかもしれないな、おまえのことなんか」そしてげらげらと下品な声で笑った。

田辺はくるりと振り向いてわたしを突き飛ばした。顔が真っ赤だった。声が震えていた。

「ぼくが……、ぼくが、もしも君津さんに高岡のこと聞いたらどんな気がする」

どきりとした。君津さんというのは剣道部の男子の主将だ。わたしの秘かな憧れをまさかこの愚鈍な田辺に見透かされているとは思ってもよらなかったのだ。わたしは見事にしどろもどろになり、何を勘違いしているのだという声に力がこもらず、どうしてそう思うのかとおそろおそろ尋ねた。田辺はにじんだ涙を手でぬぐった。

「いつも君津さんのこと話してるじゃないか。蹲踞（けんどう）で、試合に入る前の、つま先立ちで腰を下ろす姿勢）の姿勢がいいとか、負けても言い訳しないのが立派だとか、高校から特待生のお呼びがかかっているとか」

怒りの解けない低い声だった。そうかもしれない。いじけたような田辺をなじるのにいちいち君津さんを引き合いに出し、田辺とは無関係なのに君津さんを見習えとさえ言った気がする。うるさそうに聞いていないような振りをして、田辺は全部聞いていたのだし心の中で苦笑していたのかもしれない。口に出してからかったりしなかったのは、同病相憐れむといったような心持ちか、あるいは武士の情けか、いずれにしてもわたしの態度とはえらく違った。

「……ごめん」

わたしはむすつと呟いた。田辺もむすつと答える。

「いいよ。言われなくても知ってるよ。デブなんか相手にされないって」

それはわたしにしても同じことだ。どんなに一生懸命稽古しても、君津さんの目に留まることはない。彼が好むのは、剣道ではなくお茶とかお華とかをやるような女の子だ。彼が好きなのは三年生

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

の誰々だと、妹の気持ちも知らずに能天気な兄が教えてくれた。クラス委員をしているそのひとは知的で落ち着いた雰囲気を持っていて、実際にはピアノとバレエを習っているそうだけれど、たしかにお茶やお華も似合いそうだった。あんなひとと比べたら、わたしなど棒を振り回すただのガキ大将だ。君津さんに近寄っていくにもチャンバラで切り結ぶ以外に方法がない。すると、なんだかいまさらながらに自分の立場がよくわかった気がした。それまで、わたしは何でもしやにむに我を通せば思うようにならないことなどないと思っていた。たしかに君津さんには届かないが、少なくとも自分は田辺よりは優秀な人間であり田辺よりは世界を中心に近い場所において、彼を保護してやるのは余裕からくる慈悲心だと思っていた。でも気づいてみれば、田辺もわたしも大した違いはなかった。好きなひとに好きだと堂々といえるだけのものを己に備えておらず、駄目だとわかっていてもなお告白するだけの勇気などもない。「それに、ぼく、もうすぐ転校するし」わたしはゆっくりと首を回して彼を見た。「どこに？」東京だとつまらなそうに彼は言う。「そうか」わたしはなんとなく道の端にしゃがみ込んだ。目の前を川が流れている。水量は少なく、乾いた土手には手を切りそうな薄の葉が揺れている。そんなものを眺めながらしばらく黙っていた。田辺と別れることがそれほど淋しかったというわけではない。少しばかり考えることがあったのだ。

(松村栄子「001にやさしいゆりかご」)



99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67



一九六〇年十二月二十三日。

ニューヨークに着いて、きょうで五日目だ。そして私のアメリカ滞在もやっと一と月近くになる。D君とは十九日に別れたが、クリスマスがすんだらまた一緒にセントルイスへ出掛ける約束をした。こんどは母君がクリスマス・プレゼントに買ってくれた五十九年型の

シヴォレーだからガスの危険はないという。「本当は君たちもクリスマスによけるとよかったんだが」D君が困惑したようなハニカんだような顔で言い出すのに、私たちはあわてて、そのころさしは感謝するが、こちらにも予定があるからと辞退した。D君の家に泊めてもらったことは貴重な体験になったし、一家の温かいもてなしは心から有難かったが、何といても気骨は折れた。「シヨウ」だの「ミチュ」だのと呼ばれることは、慣れれば何でもないことだろうし、はやく慣れてしまふべきかもしれないが、一方ではそんなことになってしまつては大変だという気もする。何が大変なのかは自分でもよくわからないが、とにかく困ることは困る。

アメリカが理解しにくい国だというのも、一つはこんなことが原因なのかもしれない。つまり、われわれはこの国に同化されてしまう

か、離れて外側に立つかどうかで、その中間にすることが許されない。私にしても、もしも二十歳も若ければ「シヨウ」と呼ばれても平気だろうし、英語ももつと早くおぼえられるかもしれない。しかし、そうなるとうちは日本人ではいられなくなるはずである。アメリカを愛するにしろ、憎むにしろ、アメリカの枠の中でしか、ものが考えられなくなる。だが、また私のように女房づれで、こうやってブラブラしている者にとつては、アメリカはひどくつつきにくい。

街を歩いていても、どこを眺めていいのか眼の焦点の合わせようがない。二度目のニューヨークでは、さすがにこの前のときのようにブラードウェイをそれと知らずに歩くことはなくなつたが、依然としてどこを向いて何を見るべきか見当がつかない。こんどニューヨークでは私は、ミュージック・ホールのライン・ダンスを見た。近代美術館へ行つた。『マイ・フェア・レディ』を見た。グリニッチ・

ヴィレッジの酒場や詩人が即興詩みたいなものをやっている地下の喫茶店へ行つた。五番街のサックス百貨店やダンヒルの店で買いいものをした。けれども、これはみんな東京にいてもできることばかりだ。近代美術館へ行つたとき、ピカ

33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12 11 10 09 08 07 06 05 04 03 02 01

ソやマチスやアンリ・ルツソーの絵ハガキでさんざん眺めてきた有名な絵ばかりどつさり並んでいるのを見た。しかし見終わって外へ出たとき、街の様子は入る前とちつとも変わつて見えなかつた。ちょうど京橋のプリチストン美術館を出てきたときと同じだ。中で一枚でもニューヨークの街の絵を見つけていたら、たぶんこんなことはないはずだ。いやニューヨークの絵でなくとも、アメリカを描いた何か、アメリカを現している何かを見つけたら、こういう変にサツパリした気持ちではいられないだろう。いま私が近代美術館で憶えていることと

いったら、なかのカフェテリアで食つた鮭の燻製と、絵や彫刻をま

えにして女房が私の写真をとつたことぐらいだ。鮭は

ナツシユヴィルでは食べられないニューヨークの味がしたし、美術館の中の記念撮影は日本にいては絶対に不可能なことだからだ。(じつは美術館へカメラをさげて行つたのは偶然のことだ。当然それは入口のクロークであずけさせられるものと思つたから、そのむねを申し入れると、係りの婆さんは妙な顔をして「なぜ持つて入らないのか」と言う。こういう無造作な寛大さはアメリカ特有のものではないだろうか。そのかわり中で絵を見るより写真ばかりとっている人が多かったのも、いかにもアメリカ的だつた)。

(安岡章太郎「アメリカ感情旅行」)



66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38 37 36 35 34

要するに、ニューヨークは何もない街らしい。だから、その点、東京によく似ているといえる。実際、商店の飾り窓のかざりつけだの、道路から直接二階へ上る狭い階段の入り口だの、そんな何でもない街のたたずまいの中に、ときどき「おや」と思うほど東京にそっくりの情景が眼につく。そう思つて眺めると、東京がニューヨークを真似しているのか、ニューヨークが東京を取り入れたのか、一瞬どっちがどっちだかわからなくなるようだ。私の前を、ゴムの半長靴をはいた女が一人、前かがみの姿勢で歩いて行く。踏み荒らされた舗道は毀れてデコボコだし、おまけに一週間まえに降った雪が凍りついたり溶けかかったりして、よほど気をつけないと滑つてころぶか、氷まじりのヌカルミにぞつぷり足のクルブシまでつかつてしまう。道の片側に高い板塀がつづき、中ではコンクリート建築の作業をやっている。間断なしに響く重苦しい金属音。道路をうめつくしてやつと動いているタクシーや乗用車。……

見るものは何もない（その気になれば芝居でも、美術品でも、世界の一级品がふんだんにあるにもかかわらず）、ぼんやり休んでもいられない、そのくせ黙つて空気を吸っているだけでも金がへつて行くようなニューヨークの街は、およそ観光客には不向きのようなだが、住んでみたら案外暮らし好いかもしれないと思わせることもある。近代美術館がそうだったように、ここには伝統や權威や際立った性格的なものは何もないかわり、外来者が眼に見えぬ圧迫感を加えられることもなさそうだ。ナツシュヴィルのようにホテルのロビーでまわり中から眺められることもないし、どんな恰好をして歩いていても平気だ。黒人の男が白人の女とつれだっているのを見掛けたが、これはナツシュヴィルでは夢みたいなことだ。……朝、コーヒーマップで食事をしていると、眼にクマどりのある顔色の悪い女の子がドーナツツを半分だけ惜しうに食べ、あとの半分を紙ナフキンに包んで、木綿のワンピース一枚の姿で雪と氷の戸外へ、ゆつくりと出て行った。彼女の痩せた肩先には、無残で優美な都会の無関心さが肩掛けのようにかかっている。

アベイ・ホテルの地下室にはストックホルムの海賊料理のレストランがある。その他、ちよつと足をはこべばヨーロッパの各国から集まった各国の料理店がそれぞれ軒を並べている。しかし前を通つても別段、どの店へ入ろうという気もしない。アメリカへ来て「戦前並み」のフランス料理を食うというのが馬鹿馬鹿しいからではなく、興味がまったくわかないからだ。それなら日本料理屋はどうかというと、最初から私はこれに最も反発を感じた。話に聞くだけでもイヤなことだと思つてた。しかし一度でも誘われて入つてみると、ここには麻薬のような吸引力がある。先月末、アメリカに着いて三日目だったが、M紙の特派員Y氏につれられて行つた店で、ミソ汁を一口すすつた瞬間、私は嘘もかくしもなく、全身から一時にシコリが脱けて行くのを感じた。まるで毛穴が全部ひらいて、そこから自由な空気がいっぺんに流通しはじめるみたいだった。それに給仕人に母国語で注文を発し、母国語でこたえられるのは何としても避けがたい魅力だ。汽車や劇場の中などで同国人に出会ふと、本当のところ顔をそむけたくなる気持がある。それが食い物屋では逆の作用をあらわしてしまうのは、どういうわけだろう。ドルが円で呼ばれ、51 street が五十一丁目と言いなおされるようなことを、どうしてうれしがるのかわからない。けれども腹が空いてくると、脚が自然に日本料理店の方へ向いてしまふのである。

（安岡章太郎「アメリカ感情旅行」）



読解問題 1月4週分

問1 読解マラソン集3番「『話』なしには夜も日も明けぬ」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 「安寿と厨子王」が救いようのない話に思えるのは、失われた月日が返らないからである。

B 人間は、自分の思想をより高くより広いものにすることが大切だ。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集3番「『話』なしには夜も日も明けぬ」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 昔の子供にとって、人さらいは恐怖の対象であった。

B 昔の子供にとって、サーカスに売られるということは二度と父母に会えないことであった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集3番「『話』なしには夜も日も明けぬ」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 厨子王と再会したとき、母は、過ぎ去った時の埋め合わせができたと感じた。

B 母と再会した厨子王にとって、過ぎ去った時は二度と戻ってこないものであった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集3番「『話』なしには夜も日も明けぬ」の長文を読んで、○と×の組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 短編小説は泡沫のようなものだが、子供のときに読んだものは忘れられない。

B 昔の子供にとって、サーカスでの苦行は絶望感を感じさせる出来事だった。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集1番「『障子』という言葉は」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 時頼の母は、障子の張り方を通して、時頼に小事にこだわらない大きな心を教えようとした。

B 清書納言は、たてつけの悪い障子を作るような人の気が知れないと思った。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集2番「それからまた相当な道のりを」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 千代は、蜜に一匹でも出あったら自分の人生を変えようと思っていた。

B 英子が川に降りようとする竜夫を引きとめようとしたのは、千代のことが心配だったからである。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集4番「なにぶん絵本のことで」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 森鷗外は、山椒大夫の伝説を史実に忠実に再現しようと試みた。

B 大人になると、本から深い感化を受けることはなくなる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集4番「なにぶん絵本のことで」の長文を読んで、○と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。

A 不幸な女が盲目になったというところに、慈悲がある。

B 不幸な女がハッピーエンドになったら、物語はつまらなくなる。

1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 2月4週分

問1 読解マラソン集5番「三月十五日、いつものように」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 荷車を押してくれた先生と奥様にお礼を言った見ず知らずの人は、実は荷車の主の知人だった。
B 先生は、私に、手助けで押すのも大事だが、押してもらっていることも忘れるなど言ってくれた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問2 読解マラソン集5番「三月十五日、いつものように」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 筆者は、「アンテナのそうじ」という言葉で、先生の言いたいことを正しく受け止めることが大事だと思っている。
B 先生は、だれに対してもその人の立場や境遇に合った話をしてくれる。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問3 読解マラソン集6番「猫は吐き気がなくなりさえすれば」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 猫の死んだ季節は、夏である。
B この猫は、メスだった。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問4 読解マラソン集6番「猫は吐き気がなくなりさえすれば」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 病気の猫に、皆冷淡だった。
B 猫が死んで、もう一年以上たつた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問5 読解マラソン集7番「その子供には、実際、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 子供は、その日学校を休んで寝ていた。
B 子供は、ひとりっ子で、勉強はよくできた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問6 読解マラソン集7番「その子供には、実際、」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 子供は、食事をすると身体が汚れるような気がした。
B 学校の先生たちは、その子供のやせようは、家庭の父親に問題があると思っていた。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問7 読解マラソン集8番「その翌日であった。」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 子供は、これまでも鰯だけは何とか食べることができていた。
B 母親が手品師のように手を裏表に見せたのは、子供の注意をひきつけるためである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

問8 読解マラソン集8番「その翌日であった。」を読んで次の問題に答えましょう。

- と×との組み合わせが合っているものの数字を書きなさい。
A 母親が、蠅帳（はいちょう）の中をわざと子供に見せないようにしたのは、材料そのものを見ると子供が気持ち悪がると思ったからである。
B 子供が食べた鰯は、玉子焼き、イカ、タイ、ヒラメなどである。
1 A○ B○ 2 A○ B× 3 A× B○ 4 A× B×

読解問題 3月4週分

問1 読解マラソン集9番「地球環境問題複合体の」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

人間は、自分たちより遠い動物種の絶滅にあまり関心を向けない。
1 ○ 2 ×

問2 読解マラソン集9番「地球環境問題複合体の」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

「貴重な種であり、絶滅寸前だ」と理屈を持っているほうが、論争に勝つ。
1 ○ 2 ×

問3 読解マラソン集10番「田辺がある女の子に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

「わたし」は、田辺が自分に会いに来る理由を誤解していた。
1 ○ 2 ×

問4 読解マラソン集10番「田辺がある女の子に」を読んで次の問題に答えましょう。
次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。

「わたし」は、こと恋愛に関して田辺が自分と同じ立場にいと気が付いていなかった。
1 ○ 2 ×

問5 読解マラソン集11番「一九六〇年十二月二十三日。」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
アメリカという国は、外国人の立場から見なくては理解しにくい。
1 ○ 2 ×

問6 読解マラソン集11番「一九六〇年十二月二十三日。」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
筆者は近代美術館でアメリカ特有の寛大さに触れ、サッパリとした気持ちになった。
1 ○ 2 ×

問7 読解マラソン集12番「要するに、ニューヨークは」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
ニューヨークの個人に対する無関心さは、外来者にはかえってやりやすい。
1 ○ 2 ×

問8 読解マラソン集12番「要するに、ニューヨークは」を読んで次の問題に答えましょう。

次の文を読んで、○だったら1を、×だったら2を選び、その数字を書きなさい。
汽車や劇場など公共の場で同国人に出会えると、とても安心できる。

1～3月

小1 コード：nane パ ス： PDF	小2 コード：nane パ ス： PDF	小3 コード：nane パ ス： PDF
小4 コード：nane パ ス： PDF	小5 コード：nane パ ス： PDF	小6 コード：nane パ ス： PDF
中1 コード：nane パ ス： PDF	中2 コード：nane パ ス： PDF	中3 コード：nane パ ス： PDF
高1 コード：nane パ ス： PDF	高2 コード：nane パ ス： PDF	高3 コード：nane パ ス： PDF